長野県革新懇ニュース

2021 年 11 月号
発行日 11 月 10 日
会　費　2,000 円
購読料　3,000 円（送料込）
振　替　00510-3-15971

269

発　行　日本と信州の明日をひらく県民懇話会
（長野県革新懇）発行人：山口光昭　編集長：高村裕
〒 380-8790　長野市県町 593　高校教育会館内
TEL：026-234-1231　FAX：026-234-2219　ﾒｰﾙ：mail@nagano-kakushinkon.com

＝＝＝＝＝今号の主な記事＝＝＝＝＝

1面　菅谷昭さんインタビュー
2面　1面続き、「近現代信州の歴史回廊」小平千文さん
3面　「衆議院選挙の結果について」 他
　　読者の声、漢字パズル
4面　雨よ降れ 「嘘つき誠ちゃん」 窪島誠一郎さん
　　写真で辿る信州と戦争「戦争に協力させられる市民」北原高子さん
　　映画評論『MINAMATA』 内山到さん

長野県革新懇　検　索

1943 年更埴市（現千曲市）生まれ。信州大学医学部卒。1991 年より、チェルノブイリ原発事故被災地の医療支援活動に参加し、現地を 7 回訪問。1996 年からベラルーシに単身滞在。5 年半にわたり、子どもたちの治療にあたる。帰国後、県衛生部長を経て 2004 年から松本市長。2020 年 10 月から現職。

学生とともに 平和を学び、語りたい

菅谷（すげのや） 昭（あきら） さん

（松本大学・松本大学松商短期大学部 学長）

始めは断った松本市長への出馬

Q　松本市長時代の思い出をお聞かせください

私は政治や行政については全くの素人でしたから、田中康夫知事からの県職のお話の時にも一旦はお断りしました。松本市長の件も始めはお断りしました。ところが市民の皆さんが入れ替わり立ち代わり来られて、「とにかく出るだけ出てくれ」ということで、その熱意に促されて出馬することにしました。市政を変えたいという思いが強かったのだと思います。正直言って、当選するとは思いませんでしたが、市民の熱い期待が結果に表れたと思っています。そんな経緯があったので、市政運営の大前提としては、市民が主体性を持って街づくりに参加するということがベースにありました。同時に、私は医療者ですから、命を大切にする街をつくりたいという思いがありました。そこで市政のキーワードを「命」として、「３Ｋ施策」というものを作りました。一つが「健康づくり」、二つ目が「危機管理」、三つ目が「子育て支援」でした。そして「地方から国を動かそう」と職員に呼びかけました。

しかし、職員は小さな地方都市から国を動かすなんてことはできないと、初めは消極的だったですね。私は「まあそう言わずにやろうよ」と言って、「健康寿命延伸都市」という政策を立ち上げました。当初は必ずしも評判がよくはありませんでしたが、それでも職員が色んなジャンルの健康テーマを考えてくれました。そうしたら、なんと5年後に国がこれを認めてくれて、それで今では「健康寿命」という言葉が当たり前になりました。だから小さい町からでも国を動かすことができるのだと分かり、職員が自信をつけたと思います。次にやったことは、「食品ロス３０１０運動」です。これが全国を動かして、10月30日が「食品ロス削減の日」に決まりました。私としてはみんなすごい能力を持っているのだから、頑張れば国は変わるということや、地道なことをきちんとやって繋げていけば一つの流れができてくるということを職員に言ってきました。

運命の選択だったチェルノブイリ支援

Q　チェルノブイリの医療支援活動にかかわった動機をお聞かせください

これは運命論的な話になるのですが、実は、私は7人兄弟の末っ子で、母が年を取って産んだ子どもでした。そこで母が行く末を案じて、易占いをしてもらったようです。そうしたら、この子は43歳で死ぬという卦が出てしまった。母の臨終の時に叔母が、母がそのことを非常に気にしていたと話してくれました。私は当時、医学部の最終学年を前にしていたので、馬鹿げていると一笑に付していました。

しかし、徐々に43歳に近づくにしたがい、もしあの占いが当たったら、と考え始めました。ちょうど43歳の時にアメリカで学会がありまして、その帰りの飛行機の中でふと、「今43歳で、運命の年だ。もしこの飛行機が落ちれば確実に死ぬ」と考えたわけです。それで、改めて今までの医療者としての道が本当に初心通りであるのかと振り返った時に疑念を覚え、これからは悔いのない生き方に変えようと決意しました。

そこで、偶然にもチェルノブイリの原発事故で、自分の専門領域の甲状腺癌が非常に増えていることを知り、大学を辞めて現地に行くことにしたわけです。皆さん、誤解されていて、ボランティアだとか、高邁な考えだとか仰いますが、全くそうではなくて自分の人生のリストラなんです。自分のできる範囲でやってくれれば良いということでしたから、気が楽だったですね。

私が現地を最初に訪れたのは事故後5年目で、その後、5年半滞在しましたが、言うまでもなく大変な状況でした。たとえば、原発から１００㍍のところに立っていても痛くもかゆくもないです。ところが、放射線測定器で測ると針が振り切れ、アラームは鳴り続けるわけです。大変な被曝ですが、全然わかりません。だから放射線は本当に怖いです。事故後10年目の時に、子どもの甲状腺癌の増加はピークでした。

30年後の２０１６年にも現地に行きましたが、居住禁止区域は相変わらず進入禁止でした。許可をもらって中に入りましたが、まだまだ放射線量は高かったです。とても収束しているとは言えません。健康被害についても子どもたちの免疫機能の低下とか、早産、死産、先天異常などの周産期の異常が低線量地域でも起きています。

私が今一番に気にしていることは、35年経って低線量の被曝をずっと受けていることが何を起こすかということです。低線量被曝、つまり年間の被曝量が1ミリシーベルトならば、一応良いことになっていますが、それでも免疫機能が低下している状況があるわけです。低線量被曝は心配ないと言われていますが、誰も正解を持っていません。福島はまだ10年ですから、チェルノブイリの教訓を大事にしなければ、今後、様々な問題が発生してくる可能性はあります。

原発の危険性を早くから認識

Q　福島原発事故についてはどのようにお考えですか？

事故から10年経っていますが、チェルノブイリにいた当時から日本でもいつか事故が起きる可能性はあるだろうということは感じていました。日本に帰国後、あちこち講演に招かれた時に、私は次の三つのことを話しました。一つは、新しい原発は造らないで、現存する原発については事故がないように安全管理をしっかりする、そして、耐用年数が来たら終わりにするということです。二つ目は、再生可能エネルギーにシフトすべきで、そちらにお金をつぎ込むということ、三つ目が、電気を大事に使う節電です。私たち自身がそういう意識を持つことが大事だということです。この3点をずっと申し上げてきました。ところが事故が起きてしまいました。大変なショックでした。

松本市長の時、松本市で国連軍縮会議を開催しました。それがなんと２０１１年のことです。3月11日に原発事故が起こったので、どうするかということになったわけです。私はやろうと主張し、国連も是非やってほしいということで、実施することになりました。その時の話題の一つが、福島原発の事故があったものですから、私はチェルノブイリの話をしながら、併せて福島の話をして、最後に言ったことは、日本は政策として経済を優先するのか、命を優先するのか、今これが問われているということでした。そのことは今も引き続き問われていると思います。

【2面に続く】